

「不要不急」の身辺雑記

オンライン講義とマスクとパチンコの話

古川 岳志

私のコロナ

コロナ禍について書こうと思うが、感染の流行はまだまだ収まりそうもなく総括めいたことが言えるような段階ではない。そもそもこのような「災害」は、その人のおかれた状況によって見え方、受け止め方も当然変わるのだから、それぞれがそれぞれの「私の見たコロナ禍」について書き残しておくことが、とりあえずは大事だという気がする。

私は、大学の非常勤講師として週に何コマか講義をすることで生活している。複数の大学で働いているが、どこも単年度契約のアルバイトだ。いわゆる非正規雇用労働者の一人なのだが、コロナの影響が直撃したであろう飲食店やサービス業等の非正規雇用労働者たちに比べると影響は大変小さかったと思う。仕事は全く減らず、収入も減らなかった。現在の収入は生活が維持できるギリギリしかないが、これはコロナ以前からそうだった。当然「持続化給付金」の支給対象でもない。国民年金や国民健康保険の減額対応なども受けられない。以前の収入が減って、私と同じ額になってしまった人は、これらが受けられるだろうが、私は単に元のままなのだから関係ない。

仕事の内容は影響を受けた。リモート講義をしなければならなくなった。特に2020年度の前期(4月～9月)は、何の準備もない中、未経験の労働環境に急いで適応しなければならず大変ではあった。教室で同じ空間にいる受講生に

ライブで話をする形式から、録音・録画しておいた講義データをオンデマンドで視聴してもらう形式へ。必要な準備は大きく変わった。ただ、講義の中身は、あまり変わってはいない。オンデマンド型の講義は完全に一方通行だが、私の担当講義の大半が大人数の受講生を相手にするもので、対面講義の時から、ほとんど一方通行だったのだ。講義前後に受講生と対話したり、質問を受けたりする機会もあまりなかった。あっても、試験の内容に関するものくらいで、それくらいならオンデマンドでもメールで受けられる。

リモート講義になって楽しいことも少しあった。深夜、自宅のパソコンに向かって独り講義を録音しているとラジオDJ気分を味わえたりもした。配信後に提出される受講生のミニレポートは「リスナーからのお便り」のようでもあり、なんとなく「伝わった感」を得られたりもした。これは、これまでの教室での講義では味わえなかったものだった。対面講義に戻った後、教室の後方で何人もの受講生がスマホゲームに熱中していたり、マスクはしつつもお喋りに夢中になっていたりする、これまで同様の教室風景が目に入り、あの「伝わった感」は所詮、幻想だったと気づいたのだが。講義録音中は完全なる無反応だから、それとの対比で「お便り」がよりきらめいて見えたのかもしれない。

双方向的なコミュニケーションのある少人数講義や演習などの、本来、大学教育としてあるべき姿の講義であれば、対面形式の方がオンラ

インより断然良いのは間違いない。だが、私が担当している大人数講義なら、対面とオンラインとではそれぞれ一長一短はあるが、「質」の差はそんなにならないような気がする。それが良いのか悪いのかは別の話として。

この間、SNSを通じて、他の同業者のオンライン対応策や、大変さについての声もかなり聞くことができた。教材作成法の工夫など教えられたことも多い。個別の学生対応が多く四苦八苦している方、大学毎に違うオンラインシステムのマニュアルと格闘している方、対面講義復活に当たって感染面で不安を強く抱いている方、世間でイメージされている学生の欲求（対面講義再開を強く望んでいる）と、実際の学生たちの反応（オンライン継続を望む学生も多い）とのズレに戸惑っている方など、普段はあまり耳にできなかった同業者の苦悩を共有できたことで、ちょっとだけ連帯意識を持つこともできた。これまでは、勤務先の講師控室等で同業者と挨拶以上の会話をすることはほとんどなかったから、バーチャル控室の方が情報量は断然豊富だった。もちろん、実際に同じ空間で顔を合わせて、何でも無いような挨拶、寒くなりましたね、暑いですね、コロナ大変ですね、良いお年を、などなど決まりきった会話をすることには、それはそれで豊かさがあるのも間違いはないのだが。

(1)

コロナ禍で私はかなり太った。ここ数年は、週に8～9コマ程度の講義を担当していて、曜日によっては一日に二か所回る日もある。運動を意識しなくても移動だけで一日一万歩以上は軽く歩く日も多かった。リモート講義になってそれがなくなり、運動不足となった。また、家にいる時間が長いと、どうしてもお菓子類をパクパク食べるようになってしまう。オンデマンド講義は基本声のみの出演で、誰かの視線を感じる必要もなかった。一部の講義や打ち合わせなど、ズームで顔出しをする機会ももちろんあっ

たが、下半身はゴム紐のトレパンで十分だったため、それも肥満化に拍車をかけた。外出用の服をほとんど買わなくてすんだのは経済的に助かったが、いざ、対面が少しずつ復活となり、一年前のズボンを穿こうとすると全く入らず、慌ててユニクロにワンサイズ大きいのを買いに行った。これだけ太ったということは、オンライン講義という労働は、肉体的には楽だった、ということなのだろう。たぶん。仕事量はずいぶん増えたような気はするのだが。

そういえば、ズームを使って生中継講義をする際には、まるで自宅を教室として提供させられているようで理不尽な気持ちにもなった。場所代寄せ、と思ったりしたが、もちろんそんな話は一切なかった。ただ、これも、今までと同じなのだ。個人研究室を持たない身分の私は、講義準備のほとんど全てを自宅でやってきたのだから。

うだうだと何の話をしているのか。「コロナに奪われた日常」って一体何だったのか、という話だ。「日常の何か」は確かに奪われたのだ。けれども「コロナ禍で日常のありがたさがよく分かった、皆でもうひと踏ん張り頑張っ、日常を取り戻しましょう」というようなことを言われても、白けた気持ちになってしまう。「日常」ってそんなに良かったか、と。

マスクの風景

もちろん、コロナ禍の今が良い、などと言っているわけではない。公共空間でマスクを外せない生活は、当然面倒くさい。対面講義が一部再開すると、マスクを着けたまま90分、時には二コマ連続180分しゃべり続けなければいけなくなった。苦痛以外の何物でもない。ちょっとハイになってしゃべってしまうと、酸欠に近い状態になったりする。私は汗かきなのでマスクがすぐに汗で濡れてしまう夏は特に厳しかった。仕事をしている大学のひとつでは、対面講義と

オンライン講義を同時にする「ハイブリッド型」という、わけのわからない形式での講義を求められた。教室の密を避けるため受講生を学籍番号で通学日とオンライン日に振り分け、通学日の学生に向けて対面講義をしながら残りの学生にパソコンで同時生中継をしろというのだ。もちろん、担当者の皆さんが施設の現状と感染状況を勘案しひねり出した苦肉の策なのだろうが、私が受け持っている講義内容と受講生たちの実情を考えると全く合理的とは思えず、自主判断で、機械的な振り分けはやめ、通学・オンラインの選択を受講生の意志に任せることにした。すると大半の受講生がオンラインを選択したので、誰もいない教室で講義をすることになった。(それなら家からやりたかったが、それは特別な事情がない限り認めない、とのことだった。) たまに、教室に来る学生がいた。家のネット環境が悪かったり、クラブなどの用事で通学したついでだったり理由だった。わざわざ来てくれた学生には悪いのだけど、ひとりも来なかったらマスクしなくてもよかったのにな、なんてことを考えたりもした。

ただ、マスク生活の中で、ちょっと楽しい発見もあった。マスクをしていると口の自由が得られる、という発見だ。ぶつくさ小声で愚痴りながら電車に乗っていても平気だし、何なら歌を歌ったりしても大丈夫。まわりに聞こえない程度の音量なら。コロナ以前、マスク依存症が話題になっていたことがあった。日本でマスク着用者が増えたのは、花粉症の流行がきっかけだったと思うが、花粉シーズンが終わってもマスクをつけたままで過ごす若い女性が増えていることが社会問題として語られた。真面目に研究を追ったわけではないので、いい加減な解釈だが「見られる性」としての息苦しさが主な原因なのだろうと理解していた。非常勤先で実際に、ずっとマスクを外さない女子受講生がいたこともあった。私は、表面的には理解者のよ

うな顔をして、そのままであることを肯定していたのだが、実感としては分かっていなかった。今は分かる。マスクしたまま結構楽かも、ということが。

不関与規範に覆われている電車の中のような公共空間で、私たちは互いに無関心を演じながら、緩やかな相互監視を続けている。ここでは、まともである風、あぶなくない風を装うことが求められており、目も口も演技をしなければいけない。しかし、マスクをしていると、口はかなり自由に振舞える。まなごしの持つメッセージ性も若干弱まる。公共空間で見知らぬ他者を目視する時、口の動きが伴っていれば敵意・侮蔑の意味を持つ不穏な視線と見なされる可能性が高いが、目だけならよっぽどでなければ大丈夫だろう。今なら、呪詛の言葉を口にしながら他人を見る自由があるのだ。(それが楽しいかどうかは知らないが)「マスクをしていない」ということが明白な逸脱になったため、それ以外の逸脱への制裁的まなごしは緩くなっているように思う。最近、人混みを歩いていて、目の前に立った人の姿に一瞬恐怖を感じたことがあった。ニットキャップにサングラスをかけマスクをした大柄の男性がこちらを見ているような気がしたのだ。コロナ以前なら、わざとらしいくらいに怪しい恰好だ。「今はコロナ世界だったな」と思い直し警戒心を解いた。コロナ以前、大型スーパーなんかでは「防犯上の理由から目出し帽の着用はお断りします」というアナウンスが流れているところもあったが、今は流せないのではないか。マスクもせずうろろうろしている者に比べれば「危なくない」のだから。まるでSFの世界に紛れ込んだようだ。異様な「マスク集団」の群れの中に自分がいることに気づき、そんな感想を持った人は多いだろう。考えてみれば、町中、怪しい恰好ばかりになっている。正常と異常が逆転した世界。ちょっと楽しい。

もちろんマスク着用は身体的に苦痛だ。マス

クのまま講義をしろ、なんてどう考えても不自然かつ無理がある。マスクのない自由を取り戻したいのは当然なのだが、マスク世界になってみて、マスクにはマスクの自由もあった（それだけ、従来の公共空間には自分を防御したくなるような不自由があった）ことに気づいた、ということだ。

コロナは人々の移動の自由も奪った。気楽に旅行に行けなくなった。しかし、私のような経済的余裕のない生活をしている人間には、ほとんど影響はなかった。正月やゴールデンウィークなど、国際空港から中継される「これから海外で過ごす人たちが混雑しています」のニュースを、白けた気持ちで眺めていた身としては、閑散とした国際空港の様子を見て、ざまあみろとでも言いたくなるような、卑しい喜びすら感じてしまった。日本政府は、感染状況が若干落ち着いてきた頃、「GoTo トラベルキャンペーン」という歴史的愚策を実施した。高級ホテルの宿泊や料理などが普段より格安で楽しめたらしい。多くの人が利用したのは知っている。ただ、この時に「お得」を味わえたのは、通常料金の旅行でも苦も無くできた人たちだけだっただろう。私にも「お得」が回ってこないものか、ちょっと調べてはみたが、やはり、そもそも旅行に縁のない人間には何の関係もないイベントだった。もちろん、このまま移動の制限が続けばいい、などと思っているわけではない。非常勤先でも、折角日本に留学できることになったのに、排外主義を疑わざるを得ない過剰な防疫措置で入国できない学生がかなりの数いて、オンライン講義を用意しながら心苦しく思っている。動きたい人たちが動ける自由は、当然、回復されるべきだ。しかし、他人事感はどうしてもぬぐえない。自由に動ける人たちとそうでない人たちの格差は、コロナが終わってもそのまま継続するのだから。

これは、外食の制限も同じだ。飲食店でお酒

を飲んだりすることが制限されたが、私の場合は、常勤の仕事が任期切れになり収入が大幅に減って以降、外食の機会は激減していた。それでも年に一度か二度は居酒屋に行くこともあったが、果たして会計がどうなるか、毎回びくびくするし、家計を考えると行くべきかどうか大変な葛藤を経なければならず、コロナでそういう機会そのものが無くなって、清々しく感じてもある。近年、人付き合いも減っていて、忘年会新年会に呼ばれることもほとんどなく若干寂しさを感じたりしていたが、社会からそれらのイベントそのものが消えたようになったのも正直嬉しいくらいだった。（想像するに、私以外にも会社等の忘年会が無くなって喜んだ人も多いのではないか。）外食と言っても、格安のチェーン店は頻繁に利用しているが、緊急事態宣言下でも最低限の営業はできていたから、それほど不便はなかった。

繰り返すが、コロナ禍がもたらした現状が「良い」と言っているわけではもちろんない。旅行も飲食店のことも、上記は全て利用する側からの話であって、仕事としての飲食店が、旅行関係事業が、どれだけ多くの人々の生活を支えているかを考えれば、早く元通りになるべきなのは言うまでもない。

そしてもちろん、こんな呑気なことを言っているのは、私が今のところ感染せずにすんでいるからにすぎない。世界で500万人以上（2020年1月現在）がコロナで亡くなったという。後遺症に苦しんでいる人たちも無数にいる。生活を揺るがすような経済的な大打撃を受けた人たちも数えきれない。コロナという疫病が多くの人々に地獄的状况をもたらした災害だったことは間違いないだろう。数字が大きすぎて却ってリアリティがないくらいだ。ただ、これまでだって見る気になって目を向ければ、世界中に、あるいはすぐ隣に、これとは別の地獄が広がっ

ていたのではなかったか、ただ見ようとしていなかっただけではなかったか、ともどうしても思ってしまうのだ。

最初に書いたように、今はまだコロナ禍の総括をする段階ではない。もし、これから自分や身近な人が感染したら、全く違う見解を全く違うトーンで書くことになると思う。ただ、それを先取りして、コロナに関しては呑気な態度ではいけないのだ、真面目に語らなければいけないのだ、と必要以上に構えるのはやめたいと思う。自分を律する意識や言葉は、すぐに他者をコントロールしようとする欲望に結びついてしまう。「みんな」が我慢しているのだから、お前も我慢しろ。ふざけるな、非国民め。

パチンコとオリンピック

今回、そのようなファシズム的怖さをもっとも感じたのは、自粛要請に応じないパチンコ店へのバッシングだった。2020年4月7日、東京、大阪周辺の自治体に最初の「緊急事態宣言」が出された。キーワードは「不要不急」。今やる必要のないことは我慢しろ、というメッセージが政府・地方自治体から発せられた。飲食店・大型商業施設等に対して、営業中止の要請が出された。応じた事業者には協力金が支払われるということにはなったが、事業の実情との間にはズレがあり、容易に要請に従えない事業者も少なくなかった。そんな中、「自粛警察」と呼ばれる「密告」「私刑」的行為も横行した。どこそこの店が禁を破って営業している、客が集まっている、ネット上で、あるいは直接店舗に貼り紙を掲げたり抗議の電話をかけるなど、「不要不急」な行為を続ける者たちへの攻撃がなされた。

攻撃のメインターゲットは時期によって移り変わったが、宣言が出た当初、最大のターゲットにされ、いわば「不要不急の象徴」とされたのはパチンコ店だった。行政からの協力金ではとても経営を維持できないと判断したパチンコ

事業者の中には、自粛要請を無視して営業を続ける所も少なくなく「自粛警察」の恰好の餌食となった。

きらびやかなネオンサインで客寄せをしているパチンコ店は、都市空間の中で目に付く存在だ。今回の「コロナ禍政治」の下、いくつものスローガンが掲げられたが、最も浸透したのが「三密（密集、密接、密閉）を避けよう」だろう。厚労省が発表し各地の自治体でポスターが配られ、メディアでも繰り返し伝達された。まるで戦時中の国策標語のように。パチンコ店は、ザ「三密」とイメージされる空間だった。パチンコに興じることは、不要不急以外の何物でもないと見做された。「まともな人」なら勤労している昼日中、パチンコを楽しみ、開店前には良い台を狙って列を作っているパチンコファンたち。彼らを蔑んで呼ぶ「パチンカス」というネットスラングがあり、時に、ファンたちも自虐的に自称する。人間の「有用性」に関する社会通念的な価値意識を内面化した上で、自らを「不用な存在である」と卑下して描く言葉として。

マジョリティが「平時」から異物と見なしていた対象に向けて、「非常時」にむき出しの敵意を向けるのは、怖ろしいことに「世の常」だ。パチンコ店は、ファンたちも含めて、ある人々にとっては、みっともないものクリアランスしたいものだった。最初の宣言が出た4月の末には、いくつかの自治体が、営業を続ける店舗の実名公表に踏み切った。皆に石を投げるよう、呼びかけたも同然だった。この機会にいつそのことつぶしてしまえ、とでもいうように。⁽²⁾

刑法に賭博禁止条項が残っている日本において、パチンコの営業形態は、かなりグレーゾーンでもある。競馬競輪などの公営ギャンブルには規定法があり合法、パチンコはあくまでもゲームセンターや商店街の福引同様、「一時の娯楽に供する物を賭けたにとどまる」（刑法185条）お遊びである、ということになっている。実態が

ギャンブルなのは誰もが知ることなのに。そういう点から、ルールの厳格運用を求める人たちからも敵視されやすい。⁽³⁾

また、ギャンブル依存症という社会問題もあり「良識的市民」の味方が得にくいジャンルでもある。営業自粛区域の人たちが、区域外で営業している店舗にパチンコをしに遠征している、というようなことがテレビのワイドショーで繰り返し取り上げられた。どうしてもギャンブルをやめられない人たち、「みんな」我慢しているのに我慢できずに出かけてしまう人たち、その人たちの食い物にして商売している業者、みんなの和を乱す勝手な人間たちの業界。正義の拳で殴り放題である。演劇や音楽イベントなど「不要不急」とみなされ、打撃を受けた文化的な領域は多いが、文化人が呼びかけて配信イベントで支える、というようなことも行われた。もちろん、そのくらいの支援では焼け石に水だったのであるが、可視的な「応援」が得られる心理的意味は小さくないと思う。パチンコは、それは難しい。殴られっぱなしになるしかない。どこも誰も守ってくれないなら、無理にでも営業するしかない。

そしてさらに、パチンコの事業者に在日コリアン（ここでは旧植民地朝鮮にルーツを持つ人々を広く指している）が多いことも、敵意が向けられた背景にあったのは間違いない。「平時」からネット上では、パチンコ店に対してヘイトスピーチが向けられることも多かった。⁽⁴⁾ パチンコには、「非常時」に「外部の敵」として、排除の対象になる条件がいくつも重なっていた。こうして、最終的には、ほとんどのパチンコ店が自粛要請に従うことになった。

私は、あの時点での営業自粛要請が全く非合理的だったとまでは思わない。当時の感染状況において、営業方法の見直しが必要だったのは確かだろう。「遊び」のような不要不急の行動が

一時的に制限されることも仕方がなかったとは思ふ。ただ、何よりも理不尽なのは、民間にはこのような「遊び」の制限を課しておきながら、巨大「遊び」イベントである、東京2020オリンピックの準備は着々と進められていたということだ。

2020年3月、感染者が増える中、その夏に予定されていた五輪の開催か延期かが（密室で）議論されていた。延期が発表されたのは、緊急事態宣言が出されるほんの2週間前の3月24日だった。五輪と緊急事態。この二つが矛盾するものであることは、為政者たちも当然分かっていたのだ。そして、オリンピックを盛り上げるために用意されていた、航空自衛隊の展示飛行は「医療従事者に感謝を示すため」と無理やり意味が付与されて実施された。

翌年、新規感染者が増え続ける中、世論調査では「再延期・中止」の声の方が大きかったにも関わらず、結局、大会は無観客で開催された。ここに来て「開催して良かった」という世論が作られようとしていることも含め、あの大会が何だったのか、については、別の機会にあらためて考えたい。

今年の年頭、日本オリンピック組織委員会の三屋裕子副会長は、同委員会職員に向けて次のように訓示した。

「自分たちがチームジャパンのけん引者として覚悟を持って『この日本で二度とスポーツを不要不急と言わせないぞ』と一丸となって頑張っていきたいと思います。」⁽⁵⁾

東京2020オリンピックは、日本における国際的スポーツイベントの歴史で「開催反対の声」が初めて可視化された大会になったと思う。「盛り上げよう」という圧倒的なマスメディアの圧力の前では、微々たるものだったかもしれないが、それでもこれまでよりは多くの人に、オリ

ンピックへの「異論」の存在が共有されただろう。スポーツの社会的な意味に対しても。これは、コロナ禍のおかげ、と言うべきかもしれない。三屋氏の訓示は、今回「スポーツは不要不急」という声があったことが、いかにスポーツ利権にとって脅威だったかを物語っている。

パチンコ叩きがひと段落すると、ターゲットは「夜の街」「若者」へとシフトしていったようだ。宣言期間が終わり、感染者数も落ち着いてくると、パチンコ店の多くは、感染対策の徹底をアピールしながら営業を再開した。新聞記事データベースを検索し、次に「パチンコ店」に関する記事が出たのは、ワクチン接種会場としてパチンコ店を活用、というものだった。⁽⁶⁾

存立基盤の弱いパチンコ店は、権力に協力しなければ生きていけない。警察とのつながりの強さは誰もが知るところだ。新自由主義的傾向の強い「大阪維新の会」が長年牛耳っている大阪府・大阪市政では、2025年に「大阪・関西万博」を準備している。バブル崩壊後、広大な空き地になっていた埋立地の開発と結びつけた事業で、本当の狙いはカジノ誘致だ。そのような娯楽事業への参画を目論む、パチンコ事業者もあるかもしれない。「悪い遊び（パチンコ、夜の街）／良い遊び（スポーツ、オリンピック）」の線引きが意識されるように、「悪いパチンコ／良いパチンコ」の区分けが意識され、「良い」になろうと努力することは営業戦略としては当然だろう。

というわけで、あれだけスケープゴートにされ、総攻撃をうけたのに、今ではすっかり「ああ、そんなこともありましたね」になってしまっている。もちろん、パチンコ攻撃で直接的にけが人や死人が出たわけではないかもしれない。しかし、「非常時」の集中攻撃の浴びせられ方と「平時」の差別意識との結びつきの恐ろしさについては、改めて確認しておきたい。

感染症対策として、大衆的行動抑制策がどこ

まで合理的だったのか。その時、それぞれの立場で何を経験したのか。どんな危険をはらんでいたのか。感染の流行は、まだ続きそうだし、結論はすぐには出ないだろうが、できるだけ「空気」に飲まれずに観察していきたいと思う。⁽⁷⁾

注

(1) 実際に同じ場所にいるということや、たわいないような内容であったとしても直接会話をするには、やはり重要な意味がある。ソルニットは、ネット環境の充実によって失われたものについて次のように語っている。「数十年前にはただ思いをめぐらせたり、親しくおしゃべりをしたりするために、友だちと長電話するのはふつうのことだったが、いまではわたしの知り合いのほとんど誰もそんなことはしない。電話は予定の再調整や約束の確認といった実用的なやりとりのためだけにある。(中略) 多くの人が、はっきりした目的なしにたむろするには忙しすぎる。あるいは、それができるということを知らない。しばしば戦闘の舞台であり抽象的な接触であるソーシャルメディアが、(教会を含む) 実際の場所で直接会っておしゃべりすることによってかわってしまったのだ。」(レベッカ・ソルニット「聖歌隊に説教する」『それを、真の名で呼ぶならば～危機の時代と言葉の力』渡辺由佳里訳、岩波書店、2020、p 96)

(2) 医療人類学者の磯野真保は、新聞のインタビューで、コロナをめぐる排除の圧力の高まりについて警鐘を鳴らしている。「新型コロナは世界的なインパクトゆえにか、その『新しさ』ばかり語られます。ですが、いまその結果として社会で起きていることは『古典的』と言ってもいいくらいです。感染拡大を助長していると批判を受けたのは最初は若者、そして、夜の街にいた人たち、さらにパチンコ店やそこに入出入りする人たちです」／「つまり、コロナが起きる以前から『社会秩

序を乱す』と名指しされがちだった集団に向けて、『正しさ』のこん棒が振るわれているのです。」(中略)『『感染の危険から社会を守る』ことを錦の御旗に、実際は、社会秩序を乱すとみなされていた人々が排除されていたのです。『感染リスクをゼロにするべきだ』という正しさは、強い排除の力を生み出します。社会の『周辺』にいる人に対して特に強い力が働く。リスクはゼロか1ではいけないのに、『安全な人や集団』と『危険な人や集団』を分けてしまう。パチンコ店のケースは確かに行政主導の『発表』でしたが、個々人が普段から抱く秩序を乱す者を排除したいという感覚が、排除に拍車をかけたように見えます』(「(インタビュー) 社会を覆う『正しさ』新型コロナ 医療人類学者・磯野真保さん」『朝日新聞』2020年5月8日付)

(3) 公営ギャンブルもパチンコ同様「不要不急」と見なされやすい存在だ。客を集めての興行という側面もあり、当然、自粛要請の影響は受けた。ただ、売上げだけを見れば、コロナ以後、全体的に上昇している。近年ネット投票が主体になっているため、いわゆる巣ごもり需要に嵌った形だ。もちろん、競技毎に影響の偏りはある。コロナ禍と公営ギャンブルについては、別の機会にあらためて考察したい。

(4) インターナショナルスクール「コリア国際学園」の理事長も務める栃木県のパチンコ経営者、金淳次は、パチンコ業者の組合理事長として栃木県知事に営業再開を願い出た際に受けたバッシングについて次のように語っている。「誹謗中傷に交じって、僕の顔写真や個人情報までネットに書き込まれました。『日本から出て行け』『自分の国でやれ』という差別的なコメントも少なくありませんでした。」「社会が不安に陥り緊張状態が続くと、民衆の怒りが一方向に向けられて見境のない暴力

となることがあります。不安の中では『異分子』を取り除こうとする無意識の差別意識も首をもたげてくる。関東大震災の時は、『井戸に毒を入れた』というデマから朝鮮人が虐殺されました。差別意識は、暴力を加速させもします。その怖さの一端を感じました。」(「明日も喋ろう [中] 栃木県遊技業共同組合理事長 金淳次さん パチンコ店たたき 不安が誘発」『朝日新聞』神戸版、2021年5月4日付)

(5) 『東スポ web』2022年01月05日14時39分配信 <https://www.tokyo-sports.co.jp/sports/3908132/>

(6) 「パチンコ店 打つのはワクチン」『朝日新聞』大阪本社版夕刊2021年9月2日付

(7) 本稿の後半部分は、オンラインで開催された「韓国文化人類学会」(2021年11月20日)の企画セッション「韓日ラウンドテーブル／コロナ『以後』という問い」において、話題提供として行った発表「緊急事態宣言という『非常時』体制下、ターゲットにされたパチンコをめぐって」の内容がベースになっている。当日の議論をふまえ再構成した上で、前半の「身辺雑記」を加筆した。

(ふるかわ たけし 関西大学、大阪大学他非常勤講師)